

荒鷺

2

福岡大学書道部機関誌

巻頭言

書道部は誕生してから今年で五才になる。

今や躍進の念にある本学と同じように後退を忘れたかのように長い一本の道をわき見とせずに進んでいるのである。

書道部はペン習字部会と毛筆部会との二つの部会から成るという他大学の書道部には見られない特殊な部活動を営んでいる。だからそこには何か心に落ちないことが時をま起る。こういうことはあつてはならないことである。にとにかかわらす起るのはそれぞれの部会の部員が自分たちの部会の発展のみを願うからではなからうか？。自分たちの部会の発展が部の発展と冠うのは間違っているのではないだろうか。

我々は井の中の蛙であつてはならないのである。自分たちたちの世界にいとんとどかない間違いを起しやすい。それは象の足を見て壁をと思ふこととちつともかわらない。我々は天狗になつてもいけない。我々はあくまで謙虚であらねばならない。又木を見て森を見ないということがないようにしなければならぬと思ふ。

我々は清らかで純粋でなければならぬ。破壊せず新しいものを作りあげねばならないのである。

福岡学生ペン習字研究会を依り、又学外展を催すなどの基礎固めをしてこれからさらに発展せんとするペン習字部会の部員と、ますます磨きがかかつてきた毛筆部会の部員たちが互いに手を取りあつて、楽しいと、日をおかせぬ味わい、苦しいときには慰めあつて書道部を今以上に発展させていくことをここに願ふのである。

巻 頭 言

福 大 生

書 道 部 部 長

書道部創立五周年を迎えて

幹事

古田 龍夫

1

ペン習字部員への助言

四年

田 鍋 義 邦

3

このごろ

三年

水 脇 健 廣

5

ピクニック回顧記

二年

石 橋 健 吾

6

換 拶

福岡学生ペン習字研究会会長

ペン習字部会展回想記

三年

上 山 眞 輝

8

変についての一考

三年

荻 原 義 夫

11

大学の書道部

一年

水 上 眞 利

12

他大学との交際について

三年

近 藤 敏 則

14

話術について考える。

三年

田 中 洋 典

16

東京オリンピック見物記

二年

大 野 寛 俊

18

私の反省

二年

龍 隆 輔

20

部室の中

一年

楠 保 美 千 代

22

書道部を後にする気持

四年

西 隆 義

23

編集 後記

26

福 大 生

ちんこちらに一億円や三億円の建物がニヨキニヨキと建まらされている。ブルトーザーやトラックが

福 大 生

書道部長 古 田 龍 夫

書道部の諸君から福大生について何かそのどの
ズバリを書いて下さいと頼まれたときは、いかな
私とサアテと思った。というのは、美辞麗句でル
にこない賞め方をするのは私の性に合わないし、
と云って避口をつくのは嫌いだし、また毒にな
らず薬にならぬのはなお一層いやだからである。
しかし私は考えた。私がこのような書き物を頼ま
れるのど、学生諸君が本学の学園生活の在り方や
福大生としての誇りというふうな事について深
い悩みを持っているからであらうと。それで私は
敢然として筆をとることにした。学生諸君が自負
と勇氣を持つことは何より大切だからと考へたか
らである。

実際、本学は躍進途上の間の中にある。矢つぎ
早に農学部や工学部が出来、さらに大学館が設け
られようとしている。アレヨ／＼という間に、あ

ちらこちらに一億円や三億円の建物がニヨキニヨ
キと建まられていく。ブルトーザーやトラックが
引つ切りなしに黄塵を巻き起している。方に達す
る学生の群がホールや食堂に溢れている。本学の
ヒマラヤ登山は世界に名を知られたし、本学の送
手がオリリンピックでメダルを獲得した。アツとい
う間に本学は全国の私大の King of the Mountain の仲間入り
をした。

本学は独力でこれまで来たのである。したがっ
て学外の金力や特定の考へ方に対して自由である。
また本学は私学である。したがって、政府の権力
に対して自由である。実際、先生方は伸び／＼と
した気持で研究し、そして講義されているよう
である。ざっとこういったところか、本学の学園の
特色であつて、またこれが福大生の気質を決定し
ているように思われる。

まず、福大生は一定の型にはまらないで何か伸
び／＼としている。本学が外部の力から全く自由
であるためであらう。それから、素朴で一才野暮
つたい気がする。いわゆる料とは少し縁遠いよう

である。しかしこの点については、私は昨年度欧
してオーストリアのウィーンを訪れたときのこと
を思い出す。嘗ては花の文化を誇ったウィーンと
また学向の权威を以って鳴らしたウィーン大学と
狭い領土に圧縮せられた今日においては、或る程
街はセクス高く着こなした紳士淑女に蓋れ、また
ウィーン大学には由緒ある尸史を偲ばせるものが
あるか、市民にと学生にと何か生氣に乏しいけだ
るさを感じさせるものがあつた。福大生はこれと
はまことに対照的である。福大生の兼林と野暮
つたさとは、未だ未完成で躍進途上にある本学の
学園が持つところの溢れるばかりの生命力と活動
力の表現である。

本学の靄義において、平素は出席学生の少ない
教室と、試験前ととなれば蕭々の登壇である。そ
して試験の成績と、思はず百点を付けるようなと
えうい答案と多いが、思はず半を付けるような述
答案と少くないのは、東京のマスプロを以って噴
る一流の私学なみに直りようである。この点、公
立の大学において、割合に成績が平均しているの

たように面いている。この場合、豊富な人間味と
いう物が無ければそのような一致結束と生れな

とはまことに対照的である。しかし、公立の学生
は一般に固い感じがする。烈しい競争の入試の関
門を突破し、そして學向一途に生きようとしてい
るからであらう。これと結構なことである。ここ
ろで、固い感じが出るまで學向一途にあるとい
うことは、長い人生における青年学生の途上におい
て、それがプラスのみであるかどうかは疑問であ
る。固い感じが出るということは、それだけ人間
性の喪失、したがってまた社会性の喪失というこ
とにはならないだろうか。

私は決して學向に精進すると言っているので
はない。より大切な人間性を失うと言っている
のである。

外国の大学では固い感じが出る程學向に一途で
はない。それから、福大生は各部活動に熱心であ
る。人間味豊かに榮しくやまっている。このこと
については、本学の尸史を讀みなければならぬ。
本学は、何人にと頼らず教職員と学生だけの一致
結束で今日に至るまで世の荒波を渡って来たので
ある。そして、そこには数々の苦斗の尸史と有つ

答案と少くないのは、東京のマスプロを以つて噴
る一流の私学なみに近いようである。この突、公
立の大学において、割合に成績が平均しているの

をよみに聞いてゐる。この場合、豊富な人間味と
いう糊が無ければそのような一致結束と生れな
つたであらう。

この豊富な人間味あるいは、人間性か学園の傳
統として、福大生の気質となつてゐると思はれる。
ここに官学との異質的な違いがあるであらう。

東京の私学の学生は実に粹い気が利いてゐる。

ところで東京は資本主義の美と醜とが極端にまで
露呈されてゐるところである。

まだ修学の途中にある学生が、これらをよく批判
して攝取し得る筈はない。その粹い気が利いてい
ることと、私には何か悪すれとしか思はれない。

私は、かへつて福大生の素朴さと野暮ったさを
喜ぶのである。

以上、要するに、そのとのズバリかどうかは知
らないが、一寸素朴で野暮ったいが、何かスケ
ルの大きい伸びしろとした人間味豊かな発刺とし
た学生、これが福大生の気質であるように思はれ
る。それで満足ではないだらうか。

本学は、何人にと頼らず教職員と学生だけの一致
結束で今日に至るまで世の荒波を渡つて来たので
ある。そして、そこには数々の苦斗の歴史と有つ

書道部

創立五周年を迎えて

幹事 田鍋義邦

今年、書道部が生れて五年目、すなわち五周年
記念という部にとって目出たい年である。

我々はこの年に、書道部の部員として存在してい
るのは大変よろこばしいことである。

そして、七十名の部員、またOB会である書心会
と共に全員あげてこの創立五周年を祝い、今後の
発展の抱負を大きく胸に抱きたいのである。

我々は九州の福大書道部であり、ましては日本の
福大書道部荒鷲であることを夢み、日夜邁進せん
としてゐるのである。

我々は入部当時、字を書くことで飯を食つて行
こうと書を初めたのではない。しかし書道はマッ
て行くのだといつて部を後にする先輩の姿を目に

考べると、書は真に大切だと思わざるを得ない。我々は商学、法学、圣济学、工学、薬学を専攻しているのである。我々は書に対する熱意と理解があればそれでよいのである。五年に一人でよい、十年に一人でよい。

書家

または書道教育の道へ進とうとする者これと名を一層祝福して送ってやりたいのである。

五年間を合わせて書道部に入部した者は二百名を越すのであるが、現在書道部と書心会を合わせてみると百名足らずである。あとの半数以上は途中で脱落し残念なことであるが、私は書道部に入つてくれれば最初の苦勞から最後の苦勞まで身につけていつまでとらいたいと願うのです。また同時に最初の祭しみから最後の祭しみまで漸喫していつまで下さい。その中から書に対する熱意と理解を生み出して部を後にして下さい。

我々のサークル活動は書で結ばれ、書一本の大きな柱として活動しているところである。

その活動は派生される大小様々な問題とありましよう。しかし常に書という大きな柱に帰らなければ

ば我々の書道部としての道が開られるのではない。

書道部は我々の先輩として我々が書を受取る為にこの五年間育つて来たのである。将来に於いて常にこゝに望みをかけて進んでほしいのである。

さま書心会、部、関係各位合わせて創立五周年を祝うべきどの口何と出来なかつたが、わずかなからペン習字部会が日頃の成果を学外に於いて発表し、多大な好評を受けたのである。また五周年記念として記念タオルを作りました。記念タオルには「執中」と印刷してあります。これは「中庸」を執る」といふ意味で殿村先生から書いて頂きました。

我々福大書道部がこの五周年を迎えられますのは赤木石掃、野村清風両先生の暖い御指導の賜でございませう。

今後福大書道部の一大発展を見守つて下さいますよう御願い致します。

ましてや、我々は、ペン書きから離れた日頃の生活は考えようとするのであります。

我々のカリグラフィー活動に書ける新しき、書けるべき、書けるべき、大きな柱として活動してゐるとのである。

その活動は派生される大小様々な問題もありましよう、しかし常に書という大きな柱に帰らなければ

ペン習字部員への助言

四年 木 冊 廣

美しいペン字を書くということ、それは今日の我々の唯れどが望んでゐることである。

手紙を書く場合、あるいは、事務、ノートを取る場合等には、ほとんど我々は、ペンを用以てゐる。そのことは、時代の要求であり、書に限らず今の世の中は、何事と高効率であることを要求してゐるのである。

ペン書きは、今では、すっかり墨書に変わつて、現在、我々の日常生活に非常に進出、普及し、実用的面をなして来た。まさに、ペン書きの時代が来たと思ふのです。そして、年々我々のペン部会と発展してゐる。

ペン書きが、我々の日常生活に溶けこめば、それだけ美しいペン字を書きたいと希望する人と、当然増加しようというものである。

今後共福大書道部の一大発展を見守つて下さいますよう御願い致します。

ましてや、我々は、ペン書きから離れた日頃の生活は考えられないのである。我々は、文字、一字一字に細かい注意を払い、又、尊敬の念を持つて、毎日の練習に励んでゐるのである。

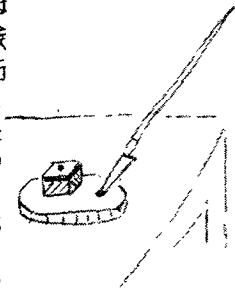
美しいペン字を書きたいと念頭に描いてゐる人は、まず、このことに留意して願ひたい。文字を正確に、注意深く、相手に対して尊敬の念を持つて書くということである。そういう態度で練習を積み、続けるならまことに皆、文字を書くことが、楽しくなつてくるでしょう。又、上達とそれ相応に早く、美しくなるものと確信します。要は、三日坊主的にならず根気よくやることである。そして、出来るものならば、ペンを持つたばかりの筆と持つて慣きたいと思ふのです。

細字とか、仮名等は、特にペン字に密接な関係があるものと思ふし、ある程度それを書きこなせる様になつたら、尚更ペン字が美しくなると思ふのである。筆を持つて人達のペン書きが割にきれいであるのを見て、皆にとそれはある程度願ひけるのではないだろうか。

つい欲ばってしまったけれども、とにかく、続け
ることである。要するに、堅固な持続的精神を持
つということである。そうしたら、きつと我らが
望んでいたところの美しいペン字が書ける様にな
るといふのである。このことは、一週間、ある
いは、一カ月で上手になるなどという甘いもので
はない。

今のペン部会の人達は、幸いにと、何んらかの
因縁でペン字を学ぼうとする様になったのだから、
いつまでと続けて頂きたいと思ふのである。
再び繰り返すけれど、ペン書きは、日常生活の
必需品であり、美しいペン書きをする様になった。
その時の君らは、重宝がられるに違いない。
講師として迎えている野村先生の素晴らしい指導
の下に、諸君頑張つて下さい。

御精進を祈る。



く思つたし、時によつては嫉妬したのである。と
同時に僕は、単にやり出したからには、という意
地だけで書道をやつてゐることを正當とせんが為

隨筆

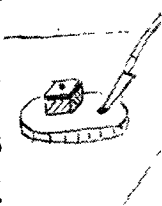
「一」の「ご」ろ

三年 石橋 健 吾

今から思えば滑稽なことである。ついこの頃ま
で、筆を取つて紙に何かつては「いいえ僕は何
の為に書道をやつてゐるのだろうか。」と真剣に
思いつめていたのだから。

そんな時はいうまでもなく、僕の書作活動その
ものか、あまり愉快な時ではなく、書の道の険し
さとゆうものに必要以上に心を痛めていた。そし
て、「何の為だなんて、私は書道が好きだからだ
よ。」とは「さう言つてのけさうな人達を想起し
ては、すぐ羨しく思つたし、時によつては嫉妬
としたようである。当時の僕はただ、書道をやり
出したからにはという意地をやつてゐるような氣
がしていたのである。へその時はやり出したから
やるのだというような情性的な意識はほとんど持
つていなかったようである。」さうであるから
實際「書が好きだからだよ。」と「言う人達を羨し
やる位むしこはさう簡単に振り切れな。

僕と「書道が好きだからやつてゐるのだ。」と思



く思つたし、時によつては嫉妬したのである。と同時に僕は、単にやり出したからには、という意地だけで書道をやっていることを正当化せんが為めにこんなことを考えたようである。「たとえ、それが、意地を通さんか為になされるにしろ、僕は書とゆうものが、如何に重要で、当然それは深く求められて然るべきかを知っている。文字は何の為にあるかを考えてみる。文字は人間が互に伝達し生活してゆくための主な道具である。もし人間が文字を發明しなかつたら現代に於けるようなあらゆる文明の発達はなされていぬに違ひない。しかるに、文字が文明の為は何らかの仕事を果たすものであるならば、これを磨き、有効なものにしなければならぬ。これは当然なことである。書をいい加減に云う人は眞の文化人ではないと言ふべきであり、僕はこのことを知つて書道をやっている。ならば、たとえやり出したからにはという意地でそれをやっているとしろそれは正当ではないのか」

こんなことを考えてみたものの、意地で書道

やるのだというような情性的な意識はほとんど持つていなかつたようである。そうであるから實際「書が好きだからだよ。」と言う人達を羨しやる花びしはさう簡単に振り切れぬ。

僕と「書道が好きだからやっているのだ。」と思いたかつた。

とにかく滑稽である。こんなことを真剣になつて考えていたのだから。そして友に「何はとさあれ君は書か好きなんだよ。」と言われみて、ふと確かにさうに違ひあるまいと考えるようになったのだから。

意地を持つて書道をやっているにしろ、僕が書に魅せられていたことは敢然たる事實であつたし、書を極めたい欲望と人に負けぬ程度持つていたつとりである。

云わんや書に対する欲は書に抱く愛着から生ずるのである。そして愛着は愛によつて、つまり好きになることによつてこそ初めて感得するのである。さうであるならば、やはり僕は好きで書道をやつてきたことに向違ひないということになる。こう考えればじめ何となく安堵したようである。

川ピクニツク回顧記

二年 広 渡 俊 明

例によつて例の如く、書道部の恒例となつたピクニツク。今回と巧天に恵まれたことは全くすばらしいことです。まず順序よく反省をしてみたいと思います。この後目は僕にとつては二度目ではあります。場所を決めるのに全く苦勞しました。個人的に行く場合は簡単に決りますが、団体となるとそう簡単には決りません。最初の計画は筑紫耶馬溪に決めておりましたか、ダム工事のため、あまり期待できないのでは？と考え変更したわけです。右記の如く、書道部の恒例とあるし、今迄以上のピクニツクをと考えてはいました。が、我々の不手際であんな結果になつてしまつて、紙上とおかりして、お詫び申し上げます。午前九時三十分、中沢郵便局前に集合の予定、しかしまたと我々の不手際から定刻集合はできず残念です。それに輪をかけるごとく、参加人員と最初の参加者、オーバーはまだいらぬ、これは関係ないけど、皆家のお考えは如何に？ 食事後のゲーム

人員をはるかに下回りました。それで三十人という人員が集りどうにか面目が保てました。ただに残りたことは、我等がブイドル、酈石先輩、それに健吾先輩といつた所員を欠いたことである。しかし酈石先輩の不参加は、考え方によつては、その方が我々には助かつたかとネノ何故かそれ曰古栗の山に帰り、とう七隈には戻りたくない、木の上を飛び回られては大変だから。いやーこれには矢張なことを、いい心に思つているため、口に出してしまひます。でと諺にもある如く、*Honesty is the best policy*。正直は最善の策と申します。どうですこの事のあること、横文字で書いたところなど心槽いと思いませんか？ 話しがされましたか、まあ途中いろいろありましたが、無事目的地に着けたなによりです。しかし頂上に着くまでの山道の急なこと、いやまつた大変でしたネ、頂上につくと食事であるが、その食事中一大珍事件発生、渡辺和さんのおにぎりのおぼけ、これには皆大笑いしてきたネ、空腹にまがいのなし、とは云え、これはちとオーバーの後員の方でお願いします。

三十分、中野郵便局前に集合の予定、しかしまた我々の不手際から定刻集合はできず残念です。それに輪をかけるごとく、参加人員と最初の参加者、オーバーはまだいらぬ、これは関係ないけど、皆様のお考えは如何に？、食事後のゲームを考えていなかった為、ホワイ、ト、ビッグ、氏よりお目玉をいたされた、本當にお目出たい話した。

いよいよ下山、みかん狩りへとハッスルしたものの、行ってカッカリ、見てビックリ、入園料五十円ときたね、それで世の中か通るか？と云いたいのを押さえた。その結果二十円で手をうった。しかしまだ驚くことはある、みかんが九円、これにほまいったネ、まあオリン、ピックの精神に則って一言、みかんを貰うことよりとお金を払わずしていかみかんを手に入れるかということであろう。大塚君などはその代表的な人物である。

とりとめをなリ話しになりましたが、手取早く云えば、案外衆しかったの一言につきると思えます。いろいろと不手際とありましたが、そこは我々兩名の顔の良さでカバーしたかと思っております。まあ、言いたいこととあるでしょうが、我々の云いたい様に云わせて下さい。

最後に、我々の力のおよびなかった矣は、次回

食事中一入珍事件発生、渡辺剛さんのおにぎりのおかげ、これには皆大笑いしてきたネ、空腹にまかいとのなし、とば云え、これはちとオーバーだの後員の方でお願いします。

尚いろいろと手伝って下さった、橋本さんにお礼と、おくせみを申し上げます。

挨拶

福岡学生ペン習字研究会会長

上山真輝

このたび福岡県内に於ける大学の短期大学のペン習字愛好者の団体である。福岡学生ペン習字研究会が発足し、はからすと会員の皆さんの御推薦によつて、名誉ある本会の初代会長に就任いたしますことに相成りましたことは、私の最と光栄に存ずるところであります。すべての奥に至らぬ人間である上に、このような会の運営につきましても何等の知識もなく、なおさら識見など持ち合わせない私であります。

会長に就任したとは言いますとの、これから皆さまの御指導、御鞭撻におすかりして大任を完了したいと思つておりますので、何分よろしくお願ひ申し上げます。

今やペン習字は単なる流行ではなく社会的な要請となりつつあります。

これとしまして、会員相互が本会を中心として、しっかりと結びつき活動して行く。これが一番大切な

字を書くというところが我々の日常生活の中でどんなに大切なことであるか今更言うまでもないことと恐れます。いくら機械万能の世の中でペン書きからのかれることは出来ません。

「美しいペン字を書けたら」の願ひは万人の願ひでありましょう。こんなに重要なペン習字と学校ではほとんど専門に教えられる時間がなく、大学を出ると悪筆に立く例が多いのであります。福岡県内の大学、短期大学のペン字を趣味とする同僚が、手を取り合つて互いに人生を語りペン習字のあらゆる問題を真剣に討議し、会員相互の親睦融和を図り、学生ペン習字の普及向上を行い、とつてペン習字文化の発展に寄与することが出来れば真に幸であります。

私はこの将来性ある福岡学生ペン習字研究会を立派な実のある会に育てるにあつて、先ずは地道な活動から出発する必要があると考えるのであります。

会員の増加と活動資金の獲得と、勿論仕事として重要なのであります。しかしながら、私はそ

ろかし、これを捉えることが難しいということ、決して雰囲気の大切なものであることをこのう

願ひ申し上げます。

今やペン習字は単なる流行ではなく社会的な要請となりつつあります。

これにともまして、会員相互が本会を中心として、しっかりと結びつき活動して行く。これが一番大切なことではないかと考えている次第であります。

今後、会員の皆さんが福岡学生ペン習字研究会に全力を精集し、本会がより立派なものになつて行くため頑張つて下さるようお願いいたします。



ペン習字部会展回想記

三年 萩原 義天

すべまのどのは、ある雰囲気のととで育つ。
薔薇（バラ）は、清澄な空気と豊饒な土壌のなかで、その美しい花を開くのである。

雰囲気というものは、かように大切なのである。ところで、その雰囲気とは何かと改めて向うならば、それを精確に定義づけることは、おそらく困難であろう。何とすれば、それは、本来気分的なものであり、状況的なものであるからである。

あります。

会員の増加と活動資金の獲得と、勿論仕事として重要なのであります。しかしながら、私はそ

しかし、これを捉えることが難しいということに決して雰囲気の大切なものであることを、このうちではない。

芸術にとつてと、というより、書道にとつてはとりわけこの雰囲気というものが大切である。この雰囲気あつてこそ書技の向上とか、人格の形成とかいわれるものが育つのである。

ここで諸君に懇願したいことは、「良、至、部、一書道部だけに限定することはできない。」ということに、かような雰囲気を感じてくつていふことに、本當の価値があるといえる。これは学校にと言へることであつて、惹かれた学向的雰囲気のうち自身を置くことは、価値ある人間として成長していくのである。すぐれた師とよき友に取りまかれて書の道というものに邁進することは、何よりとそのふとの書技の進歩を約束する。すなわちこの書技の進歩というものが、この「オー一回福岡学生書道部ペン習字部会展」に結果されたものと信じてやまない。

全国的にも珍しいといわれるペン字展覧会が、

成功裡に終ったことは、諸君の協力の賜物たまものと想う。
ここに紙上を借り感謝する。

さて、部会展の反省を少し記してみよう。まず
オ一に一番心配したのが観覧者の入場数であった。
何しろ初めてのことで家内、その他連絡面におい
て、不備な点がありやしなやかと心配していたが、
まずくの入りが多かった。しいて無理を言えば出展
数が多かったせいもあるが、何と云ってとも会場が
少し狭まかったことがあげられる。それから、部
会展開催にこぎつける迄に各係（作品指導、整理
係、パンフレット係、宣伝係、その他）の責任者
を中心として、全員一丸？となって活動してくれ
たことが、都生活に於ける集团的なイデオロギ
ーというものが如実に表われていた。

最後に書心会の皆様方に、このたび、書道部へ
練習部会がこゝに始めてオ一面部会展なるものを
催しましたことは、ひとえに先輩方の御尽力と
なみ／＼ならぬ御助力の賜物だと思っております。
ここにペン習字部員一同御礼かたがた感謝を申し
述べる次第であります。

は、西と東と理解できないような幼い時分から、
人生には、動物的な欲求による自我の幸福の外に

何しろ我々にとつて始めのそののですから、何
が何んだかわからぬまゝにただ一生懸命に頑張
りました結果、何とか成功裡に終りました。

今後、先輩方々の御支援を仰ぎつゝ、我々へ
練習部員努力する覚悟であります。

愛について一考

三年 水上眞利

(12)

理性的な人間には、個人的な目的のみで生活す
るなど、出来ない。それが出来ない理由は、人間
の動物的な自我のひかれる目的が、ことごとく実
現されないもので、道がすっかりふさがれている
からである。そこで、理性の意識は別な目的を示
す。しかし、要求されるべきことは、自我を全面
的に否定することではなくて、自我を理性の意識
に従属させることではなからうか、すべまの人々
幸福をたらすような、美しい活動でなければな
らない。愛について論議することは出来ない。愛

なみく／＼ならぬ御助力の賜物だと思っております。ここにペン習字部員一同御礼かたがた感謝を申し述べる次第であります。

は、西と東と理解できないような幼い時分から、人生には、動物的な欲求による自我の幸福の外にとう一つ、それよりとはるかにすばらしい幸福があるのを知っていると思ふ。自我の欲望の満足とはなんらの関係とないばかりか、むしろ自我の欲望を否定すればするほどますますその幸福は大きくなつていく。人生のすべての矛盾を解決して、人間を最大の幸福に導くこうした感情を知らない人はないであろう。この感情こそ愛と呼ばれるのである。人生とは理性の法則に従う人間の動物的な自我が、その幸福を得んが爲に、従うべき法則である。そして、愛とは人間が行う唯一の理性的な行動なのである。人はみな、愛の感情の中には、人生のすべての矛盾を解決し、眞の幸福を人に与える。なにかしら特別の力があるのを知っている。人生を理解しない人は「愛は人生に起る無数の偶然のうちの一つだ」というであろう。このような愛は、困ったことに、我々が皆いつとはなく結びつけた愛という言葉の觀念に、しっくりはまらない。愛は愛するのと愛されるのと

す。しかし、要求されるべきことは、自我を全面的に否定することではなくて、自我を理性の意識に従属させることではなからうか、すべての人々幸福をとたらすような、美しい活動でなければならぬ。愛について論議することは出来ぬ。愛についてあれこれ考えたり、論議したりすれば愛はたちまちしぼみ、その姿を消してしまふ。人は自分の友人とか、親とか、兄弟とかいつたものを、他の誰の友人や、親や、兄弟よりと、いつぞう好ましいとしま、この感情を愛と呼んでいる。我々は皆愛をこういふうに理解している。またそう理解するほかにいと考える。しかし自分の友人や親や、兄弟だけを愛するということはけつしてありはしないし、またありえないことだ。人は誰にせよ、みんな、友人と、親と、兄弟と、他の人達のことと、同時に愛しているのだとしか考えられない。それにとにかかわらず、人かその愛するもののために願う幸福の条件は、密接に結び付きあっているから、愛するもの一人にささげる愛の活動は、すべて、他のものにささげようとすると愛の活動を防げるばかりか、そこなうことにさえなり得る。ここに愛の問題が起る。愛の要求は、どんな時だろうと、いつとみんないつしよに、なんの

順序となく現われるのである。一つ以上の愛の要求をどうして秤りにかけて秤つたらしいであらうか。もし人が将来の大きな愛に名をかりて、現在のごく小さな愛の要求を押し戻すとすれば、その人は、自分なり他人なりを欺いてゐるわけで、自分一人のほか誰と愛してはいないことになる。

将来の愛というものはない。愛は今この現在にしか考えられない活動である。だから、現在に愛を発揮しない人は、愛を待たない人である。ある人を他の人より好むという情熱は、誤つて愛と呼ばれてゐるけれど、その実、眞の愛をその上に接木して、始めて実を結ばせることのできる野生の若木のようなのである。

眞の愛は、動物的な自我の幸福を否定し捨て去る時に、始めて可能となる。だから人は自己中心の生活を否定した結果、眞の愛を認識し、友や、親や兄弟を、初め、心から本当に愛することかたどるのである。愛は自分自身より他人を勝れたものとして認める心であり、行動上それが自己犠牲として発揮されてこそ、本当の愛といえるの習場から新練習場に移るとのこと、うれしのことだ。しかし余り設備がよすぎて口いつでと練習で

である。

大学書道部

一年 近藤敏則



一年生の自分にとつて他大学の部活動の状況など少しとわからないから本校につけて、それと毛筆部向について少し述べさせてもらいます。

高校と違つて時間に恵まれてゐる大学に於てラグ活動の時間と多いように思われる。これはある特定の時間内において作品を仕上げるのと違ひやる気のおこつた意欲充分な気分の方に練習がでさふい作品をつくりあげることが出来るというのには大学の書道部はとののみかと思つた。今度、学生会館の完成と共に美術部との合同練習重視されてゐる——これは精神力の鍛練につながることをかたしれない。どちらにしろ容易なこと

親や兄弟を、初め、心から本当に愛することか
でるのである。愛は自分自身より他人を勝れ
たものとして認める心であり、行動上それが自己
犠牲として発揮されてこそ、本当の愛といえるの
習場から新練習場に移るとのこと、うれしのこと
だ。しかし余り設備がよすぎて、「いつでと練習で
きる」という気が皆におこらねばよいかというぬ
心配？が頭をひすめる。

ペン習字部会に於てとぞうであるし勝負ごと全
てにあてはまることだろうが、美しい字を書くと
いうことは自分との斗いである。根気たるのと
の斗いと思われる。自分と四年間書道部を続ける
覚悟がでまいるかは未だに疑問性を含んでいる。
西先輩のいわれるように、この一年間やれる丈の
ことはやるつもりだ。

運動部が身体練習と精神力の強固を目標として
いるのと違い文化部会は精神刀、特に己の自主性
を高め、知識の豊富さを求め、あるいは未知への
挑戦を目標としているかと想われる。又、茶道部
のごとき人間性を養い生活に豊かさを備えやすら
ぶと与える部会である。その中で書道部は一種の
己の神経への挑戦かとしれない。黒と白の二つで
「美」をつくり、「美」を見いだそうとしている
のである。——ペン習字においてと余白の問題は

やる気のおこつた意欲充分な気分の際に練習がで
きよい作品をつくりあげることが出来るというの
は大学の書道部在るとのみかと思つて魅かだと思ふ。
今度、学生会館の完成と共に美術部との合同練
重要視されている——これは精神力の鍛練につな
がることかとしれない。どちらにしろ容易なこと
ではない。故に余り大きな期待を初めからとつと
その理想の大きさを、偉大さに途中でへこたれてし
まう恐れが多分にある。だから自分にあつた歩調
を進めよといふと思つてゐる。

室町時代に名声を以せた世阿弥元清は能役者で
と有名であるが謡曲作家としてその才能は買わ
れてゐた。この人の首書に花鏡という能兼書があ
る。その中に「初心忘るべからず」という段をつ
くつて色々なことをかいてゐる。つまり習ひ始め
の時は一生懸命練習に励むのだが少し上達すると
なまけて練習をおこたり、とつと高い位の考
えようとしなない。そうするとせつかく上達した腕
と衰えていき、しかも本人はその衰えには気がつ
かないといふのである。その他に現在の自分の年
齢にふさわしいものだけでなく、それ以上のものを
考察してみいかねばならず老後には老後としての考
察が必要であるといつてゐる。いすれの段階に於
てと「初心忘るべからず」を唱えてゐる。これは

書道を学ぶ、人のみの教訓だけでなく全ての運動
全ての部活動に共通していることだと確信してい
る。現在の自分はなまじか、高校の時覚えただけ
のどのでやってきた。そして少しとより高いとの
を考えずそれに甘んじてきた。とう一度、初心者
の気持ちに戻ってやってゆこうと思ふ。

大学の書道部は技術だけの面ではなく、人格形成
においてと大いに役立っていることだろう。目に
見えなくともそれは必ずあると信じている。我々
福岡大学書道部はペン・毛筆を通じて理解ある先
輩を持っている。そして我々一年生への期待と大
きいだろう。これに報いる為にとがんばらねば。
大学の書道部たるものの本来の姿を伺うていら
れたようだが横道にそれて、竟にそやなくてすま
なく思ひます。

他大学との 交際について

三年 田中 洋典

私が福岡大学書道部に入部してから、早くも三
原君、西南女学院の有地、吉田先輩等

しかしなんといつとも一番他大学と仲良くなれ

年をむかえようとしています。萩原君等に、当機
関誌に寄稿へ他大学との交際について一してくれ
と云われは良い考えか考ばないうちに締切日が
迫くなり、頭で悩んだ事をそのまゝ書こうと筆を
とった訳です。しかし *Love-letter* ならすゝんで
と述文句が浮んでしまいますが、この様に皆様方
に見せるとのは、永だかつて書いた事がなく、
思ふ様に書けません。

私は福岡学生書道連盟の役員をしている関係上
他大学とのつきあひも他の部員よりと活発であろ
うと推察されるかと思はれますが、本当は皆様か
見ているほど……。

しかし、しているといつても、個人的なつきあ
いはほとんどなく学校単位であり全く……。
入部当時は他大学とのつきあひはとより部員
相互間との交際とほとんどない毎日でした。が、
幸いにも、高校の書道部時代の先輩や同輩が連盟
の他大学に在校されていた関係上、その様な学校
とは比較的容易に往き来出来ました。(例えば
学芸大学の遠立先輩や上平田君、九州大学の小田
だといふことを書きまして筆をおきます。

最後に、何か御不審な点がありましたらどうぞ

他大学との交際について

三年 田中 洋典

私が福岡大学書道部に入部してから、早くも三原君、西南女学院の有地、吉田先輩等

しかしなんといつまで一番他大学と仲良くなくなるのは寝食、練習を共にする年一皿の連盟練成会ではないでしょうか。普段は顔をあわせると知らん顔をしている人などと仲良くなることうけあいです。又、他大学の文化祭訪問、他大学の合唱の陣中見舞、ピクニック、今年より始まった連盟親睦ソフトボール等によつてと部員が参加する事により、他大学との交際とできるのではないのでしょうか。練成会やピクニック、他大学訪問に行かずへ自分自身で他大学とつきあわなくては他大学には知つてゐる人がいから文化祭と見に行かないなどという人が多いのに驚いてゐる次です。文化祭、連盟展等に行き書道を通しての友、ピクニック・ダンスパーティ等に参加して親睦を通しての友等々、……。禁しく大学三年向をすこせたと、今をこつて考えれば他大学に多くの友をもち、互いに不満をぶつけあい互いに助けあつて来たからだろうと思つております。

今後とと未長く他大学生と交際していくつもり

幸いにと、高校の書道部時代の先輩や同輩が連盟の他大学に在籍されていた関係上、その様な学校とは比較的容易に往き来出来ました。(例えば学芸大学の道立先輩や上平田君、九州大学の小田だ)ということを書きましても筆をおきます。

最後に、何か御不審な点がありましたらどうぞ本人にお聞き下さい。

互いに考えまひ二うではありませんか。

◆ 話術について考える ◆

三年 田 鋤 義 邦

最近部内において話術というものをよく耳にする。あの人は話術がうまいからとか いや私は話術が下手だとかいつまで自分自身をためつけてゐるとのがある。

そこで私は考えてみたのだが、話術がうまいのは確かにケツコウである。が、我々はその前に重大な事を忘れたるのではないかと、最近私自身痛感するのである

いやな奴から話しかけられてと、我々は初めからその人の話しを聞こうとしぬい。「私は話しを聞く耳すらとつていなし」という顔をしてみ「ア」と上を向く、全くありうることである。

好きな恋人に接すれば、アバタとエクボでそこには話術としての技巧は何といらぬ。しかし恐ろしいことに逆の場合は、エクボとアバタという経験を感じ出すのである。そこには話術としての技巧があればある程、アバタはラーミアバタと変化し、オーデコロンを塗つくと決してなあるものではない。こゝに於いて話術というものが存在するものでしようか。

ある人は大変サル好きである。サルは安心して彼に近寄つて来る。またある人は子供が大変好きである。その子供はその人に精一杯目えて来るのです。

我々はこの事実を知るのになんら難しいとは思われない。が、これを実行に移すときに出来ないので、たゞ人間と人間、また大人と大人の社会だけあるとは決めつけられるのではない。

技巧をこらした話術、確かにけつこうである。が、話術をとつと、効果あるものにするためには今まで実行に移されなかつた根本問題を考える必要があるのではないか。

館の向き近代の日本水位を集めてつくられた道路が四方八方に続いている。その両端に各国

東京オリンピック見物記

二年 大野 憲 俊

十二日東京での最初の日は杉並区の高円寺というところで私の高校時代の先輩三人の自炊生活をしている家に到着した。

それに先輩の友達が私達と同様にオリンピック見物にきている西宮と神戸の外語大学の学生と合流し、総勢九人で六畳の部屋では本当のところ狭いという感じだった。我々のオリンピック見物三日間の印象深いものはみんなで代々木の送子村を訪れたとき中に入ることが出来ず全編みごし容姿を見ることが出来た送子村の宿舎はアパートがずらりと並んでいるという印象を与えた。その横に面したところに古代の競技場を理想させる様な屋内の競技場が二つならんでそびえているといった神々しい建物であった。これと対称的に近代のビルディングが立ちならんだ調和が何んといえない。これに続いてNHK放送センターや東京体育

見物二日目に千駄ヶ谷の国立競技場での陸上競技を観戦。私達が予想していたよりも競技場のス

技巧をこらした話術、確かにけつこうである。が、話術をとつと、効果あるものにするためには今まで実行に移されなかつた根本問題を考える必要があるのではないか。

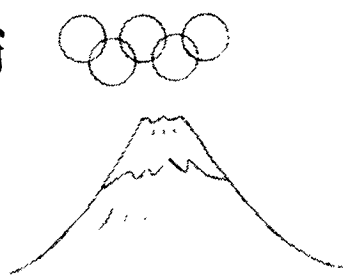
館の向を近代の日本水位を集めてつくられた道路が四方八方に続いている。その両端に各国国旗が色彩豊かに並び立っている。その横のフラフーベルトがいつそう目をかく。体育館に通ずる道が真直線に送手村南口通用門に通じている。日本の道路とは信じがたいほど整然としているのに驚く。この道路付近でサインを求めた結果、水泳の送手とウエイトリフライングの送手が多かった。

最初に会った送手はカナダのヤシとそうな金髪の女性送手で美人でした。我々は送手に話すための英語を準備していたが、最初に話したとき通じたので、自信がついていろいろ質問した。私はこの時が外人との会話の最初で忘れることのできない良い思い出となった。この送手についての失敗談が思い出される。せっかくなうつしたつどりの写真がキヤップをつけたまゝでふいになつた。又渋谷の近くの歩道でニューシイランドの送手にサインを求め、この送手がサイン帳に競歩の姿を書いてくれたこと、また町をずつといっしょに歩いて外国送手の態度の良さに感心させられた。

内の競技場が二つならんでそびえている。神々しい建物であつた。これと対称的に近代のビルディングが立ちならんだ調和が何人ともいえない。これに続いてNHK放送センターや東京体育見物二日目にチヂケケ谷の国立競技場での陸上競技を観戦。私達が予想していたよりも競技場がスケールや型の大さに驚いた。又視線は自然と聖火の方に傾き私は想像の出来ないよううれしさがあつた。案内され、高い所の席でちゅうど山の頂上から眺めている様な感じだつた。残念だつたことは送手の顔の型かほつきりわからず、特に、外国送手の予送通過はかりで、又長い向いたせいか本当のところ競技より夕方近くの聖火や芝生の色は生涯の消えることない印象として目に焼きつけられた。

翌日と前日の印象が頭に残っていて、見たという気介にとられ出かけた。国立競技場前でソリの送手にサインを求め言葉が通じず困つたことが頭に浮んでくる。又この時ほどやまとましたことはなかつたらう。その日は屋外競歩を見ることが出来た。絵画館前の道路を十六回まわつたので我々は老分日本送手の拍子と出来たし先日とニュージランドの送手にと声援することが出来た。最後の十六回目の時日本送手が扱かれたとき身長

差の二とがつくづく感じられた。三日間のオリンピック見物は私の良き思い出をつくった。又、銀座や新宿の歌声喫茶でソ連の柔道の送手の歌を聞く等、数多くの印象に残る旅行でした。滞在中心における支達や先輩に迷惑をかけるながら、何人の気がねもなく遇せたのは良き先輩や支達をとつたとの点と通観して見ます。東京での一週間、本当に楽しくできた事と遊んできたという感じではないです。又、持つべきは良き友、先輩と思っています。



私の反省

二年 龍 隆 輔

秋季合宿中萩原さんから「今度機関誌を出すから何か書いてみないか」と向われた。その時は今になってくれる人、勇気づけられる人、を求めようになりました。最高学府に学ぶ者が人の力

点さういう至験はないし、又自分のような者が書いたとしてと良い文は出来はしないし、書けるような自分ではないと思つたので断つた。それから数日後、何にげなく一回の機関誌を見つめてみる向に何か書いてみたくペンを走らせている次第です。

現在僕は大学二年生だが、大学生活一年半を振り返ると高校時代味わなかったいろいろな面での不安、心配事が生活中で毎日のように自分につきまとつてくるような気がし思い出さなくても頭が痛くなるようだ。僕が大学へ入学し最初に不安を感じたのは元々頭が要その上勉強嫌いな自分か無事四年間過せるだろうかということでした。でも入学式の際、大学へ入学したからはやれるだけやろうという気で門を通り抜けていったのだ。しかし、それと大学生活に慣れると天に夢は破られてしまった。講義はさぼるし、バチンコ口遊えりし、人からは以前のような暖かい目で見られなくなつた。小中学生の頃と比較し百八十度転回したといつてよい位だ。それ故、人から助けを仰ぐ程度か立直ろうと思つた。何時か僕は相談相手習をさぼつてばかりいると自然に部屋へ顔を出しにくくなり、部員の人達との接触と遠くなるばかり

私の反省

二年 龍 隆 輔

秋季合宿中萩原さんから「今度機関誌を出すから何か書いてみないか」と向われた。その時は今になってくれる人、勇気づけてくれる人、を求めようになりしました。最高学府に学ぶ者が人の力を借りるなんて、こんな弱気でどうするんだと何度と自分に言ひさせたかと知れない。でと駄目だった。悪の誘惑に負けたのだ。人からは一層冷めたい目で見られるようになりました。

大体僕は負けず嫌いな上、人から悪く思われるのは嫌いなので以前はいろいろ噂されるのがこわかったが、今では人から良く思われ、実際自分という人間がそれだけの価値がなかったらダメだ。それよりと人からいくら悪く思われ、うわさされてとよい。人が思っている以上に価値ある人間だったら、その方がましだと思ふようになりました。それに人に言いたいこと、人に反論したいこと、あつてと自分自身悪い奴だと思えば思ふほど、気がかけて言へなくなりしました。それだけ専らな人間になつてしまつたのかと知れないが……。

僕が大学へ入学すると同時にペン習字部会に入部しましたが、今「練習はしたか？」と向われれば、うなだれるしかありません。それに昔前の紙

るし、人からは以前のような暖かい目で見られなくなつた。小中学生の頃と比較し百八十度転回したといつてとよい位だ。それ故、人から助けを得て何度か立直ろうと思つた。何時か僕は相談相手習字をさぼつてばかりいると自然に部屋へ顔を出しにくくなり、部員の人達との接触を減らさざるばかり、それに部員の冷めたさを感じないでとありませんでした。どうしてと練習をさぼる様だったら書道部にいる資格なしと思ひ何度か退部しようと思ひました。でと、子供の頃から絵と字を書くことは、好きでしたので、書道部をやめる気持になれませんでした。今度の合宿の時、幹事から「お前はまだ練習する気はあつたのだね」と言われその時は皮肉みだいに聞こえましたが、やはり、自分の悪い事を悟り、いろいろ反省させられました。これからは悪の道を走つていただけにすぐ立ち直ることは無理だと思ふ。しかし、少しずつでと、心を入れ変えて行こうと思つている。それに今度ペン習字の初めめの試みである部会展が開かれたし、福留啓生ペン習字研究会と結成されたことだしこれから、部におよばすながら貢献させてもらうことにより、少しづつでと道を開く動機をみいだしたいと思つていきます。

部室の中

一年

久保 和代
柿本 美千代

「部室の中」という題で、原稿を書いてほしいといわれ、私産は何を書いてよいか分りませんでした。それで先ず、私産が、入部した時に感じた事を、書く事にします。

部屋が大変汚く、雅然としてゐること、これは女子部員の責任であるが、だからといって、男子の方が、誰かがするだろうといつて、ほつておいては、益々散らかつてしまふ一方です。中には、男子の方で、掃除をして下さる人もありますが、大体、男子の方は掃除をされないようです。そういう私連の様に、女の子で掃除をしない者といますが、この様な態度には以後気を付けます。しかし、男子諸君と、気を付けてもらいたいと思ひます。オニに気付いた事は、他人の物は、部室に置かないようにしては、どうでしょうか？物を

置くにしても、きちんと整頓して欲しいのですね。よくあちこちに靴が散らばつていたり、体操服が散らかつてゐるのを見ます。又、体操服で靴を磨く姿を見掛けます。あれは止めていた方がいいと思ひます。他人の物は置かない様にし、硬筆、毛筆の物や、天阿のどのの、入れ場所をはっきり決めておく必要があると思ひます。次に部屋に来る人々の顔は、殆んど決つてゐるようです。だから、一年生でまだ部員をよく知らない人といふと思ひますし、二、三、四年の方の中にと一生生を知らない人も多いと思ひます。練習と、でさるなら一つの所で出来たら、どんなに楽しい事でしょう。とつと練習にも、部屋にも、積極的に出て来るようにして下さい。皆心を割つて話し合ひ又、助け合つて、部をとり上げていく必要があると思ひます。一致団結して目的に向ひ、心豊かな生活を送る事こそ、部としての活動価値があるのではないかと思ひます。

悪い面ばかり書きましたが、諸先輩の御指導により、益々部が発展しますよう希望いたします。当、時口練習といつて、ほとんどが半紙で雅仙

し、衣冠の格と、女の姿と相成るし、老と
ますが、この様な態度には以後氣を付けます。し
かし、男子諸君と、氣を付けてもらいたいと思
います。オニに氣付いた事は、他人の物は、部屋に
置かないようにしては、どうでしょうか？物を

書道部を後にする気持

四年 西 隆 義

書道部に入部して早や四年の月日が経ぶうとし
ている。実に早いのである。現在の書道部の空
気とかいふのは、私が二年の頃から徐々に生れ
はじめたものであつて、その巨人の一年前は諸君
の想像を及ばぬ世界であつた。その変り方に我々
四年以前の諸先輩方と驚ろかれる。

ここまで書いて、私の題について一体何からは
じめてよいのやら解らなくなつたので私の入部の
動機からはじめよう。

クラブ紹介の時に、他に入りたいと思つていた
クラブが二つほどあつたが、一老を得ずじまいで
はと思ひ他をあきらめた。

高校時代とヤリをかつたか女柱ばかりだつた為
にこつぱくこつぱくやめた。それが大学に来て更境
されると思ふと何だかフアイトが湧いた。

と見いさへ、一至四巻して、巨角と向い、八巻なる
生活を送る事こそ、部としての活動価値があるの
ではないかと思ひます。

悪い面ばかり書きました。諸先輩の御指導に
より、益々部が発展しますよう希望いたします。
当時口練習といつても、ほとんどが半紙で雅仙
紙なるものは年に一枚と書かされた。
私など福書連の書道展（オ一回）に二点出品する
のに書いたぐらいで、他は左いまい大きいものは
書かなかつた。大きいといつても半折が大部分で
あつた。

赤木先生に講師としておいで願つたのは、私が
二年になつてからで、その時以来急速に書の面々
発展してきたのではないかと、大いに感謝致して
いる次です。

合宿、強化練習は現在と同じであつたか、参加
するの否かは本人次第。従つて参加者はいつと五
名内外だつた。私などはどいふかだつた。

秋の合宿と冬の強化練習以外はほとんど出席して
いないのを慮えている。へこの頃、部長は田村先
生と福書連が結成された年であつた。二年になつ
て部長を石田先生にお頼りするに至つた。

現在の部員が書に熱心とか何とか言う前に、当
時それと通用していたのである。当時の否気と
とか、書に対する意欲の程度がうかがえるという

ものである。しかしそれでは駄目であった。

それは丁度同好会から部へ昇格したばかりでまだ幼なかつたので発展の段階として仕方がなかつた。その一年向を反省してみれば結果が練習活動全てに現在の様に強化され発展をみただけであつた。つまり当時の活動内容では進歩がみられないと思へたので改めたのである。これら部全体の活動の進歩変化は部員各々にも言えると思ふ。

私が入部するに至つた動機は先にと書いた通り、単に書道をやりたいということの他に、友人が欲しいということであつた。書道をやりたいといつてとへ聞えは良いが一実はずが上手になれば良いというぐらゐの単純な気持ちであつた。一年目はその目的通りの活動で過ぎた。しかし赤木先生において獲つてからはそれだけの安易な考えでは皆についていけないやうなつた。一時はやめようかと思つた。しかし幸運にもその時、私には会計という役があり、私がやめると次にする人かいないという追いつめられた部の内情であつた。そこで私は残ることにしてそれ以後頑張りはじめたのである。更にのびると信じてやまない。

私は現在この時後につけていたことを非常に嬉しく思つた。何故ならこうして四年間書道部に居るし、福書連の人達と話し合ひが出来、又書道の方と当時よりは多少なりとも進歩していると思ふからである。

大学の四年間は書道部と書道の為にあつた様なものである。そう思ひはじめた二年中期より諸君は真似してとらうにたくないが、机上の学問の方か徐々によろそかになつていったことを私は女に対して禁じえないのである。つかあちやんごめんわ。

四年間居ると、いい加減いやなことも、苦しいことも多々ある。わかりきつたことである。しかし一旦入部したからには最後までやりぬく様努力していただきたい。入部の時の目的を達成したら次には一歩進んで次の目標をつくり、見出してみれば対して何つていくというだけの意地とファイトと負けん気が欲しいものである。欲望は誰しと何らかに對してとつまいるのである。その一筋でこの方面に出ずるら各々は勿論、書道部と

た。しかし率直にとその時、私には会計という役
があり、私かやめると次にする人がいないとい
う危いつめられた部の内情だった。そこで私は残
ることにしてそれ以後頑張りはじめたのである。
更のびると信じてやまない。

本題からは早く離れたが、ふと以前のことか思
い出され、記憶にはあまりないが、何となくのざ
く／＼として書いて書の内容ではとどかく、何争かす
るといふ時には部員全員一致回籍して、実に榮し
かったことが思い出されるのである。そして年を
食う毎に榮しくなつた書と、以前の部内の雰囲気
とを思い、とうあと追ひ出しコンパまで曰がない
と思つて淋しさをかくしきれない。あの飲んべえ
連とどうすぐお別れだと思つて、無理して飲ま
されないうすむという解放感にホツとするのであ
る。

最後に、今後の皆様の努力と書道部の御発展を
お祈り致します。



これに対して向つていくという在けの意地とファイ
トと負けん気が欲しいのである。欲望は誰しも
何らかに対してとつまいるのである。その一
部でこの方面に出すなら各々は勿論、書道部と

編集後記

立冬と過ぎた今秋、我々の部報である『荒鷲』の二号が誕生いたしました。この荒鷲に私を編輯委員は、今年で四回を迎える西日本高等学校種竜大会の記事を本誌に掲載したいと願っておりましてが日時の都合により省かざるをえなかつたことを、まことに残念に思っている文才です。求秋には是非この記事を機関誌発行の際掲載しをく思っております。又、今後と、この書道部の機関誌『荒鷲』が絶いて発行される事を願ひ部員諸氏の手により一層立派な機関誌『荒鷲』に育てていきたいと思ひます。

最後に本誌発行にあたり、色々な行事で御多忙中の竹、御寄稿、御援助下さいました御兄弟の皆さまに編集委員一同心から御礼申し上げます。今後と部発展の爲に御尽力下さいます様よろしくお願ひ致します。

芒凡 就寫

次二号

福岡大学書道部機関誌

昭和三十九年十一月二十四日発行

編集発行 福岡大学書道部

編集委員 萩原義夫

山田詔止

渡辺正道

印刷所

福岡市渡辺通五丁目

十五街区二十号

アサヒプリント社

TEL (76) 六五二六
八七〇九